



འཇམ་མཁའ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་



འཇམ་དབང་མཆོག་གི་མཛུགས་སྐྱོང་བླ་མ་

教えの心髄

法王ジグメ・プンツォク・リンポチェ

1993年カナダ法話会 講義録

司会者	01
ジグメ・プンツォク法王	
祈願文	03
講演	06
順境のうちにあるということ	07
一 南瞻部洲に生まれたこと	08
二 尊い人の身体を得たこと	08
三 ブッダが世に現れた時代に 生まれたこと	10
四 ブッダの教えがまだ世に 存在していること	10
五 法相を具えた師に師事で きたこと	11
三種の信心	13
一 清浄なる信	14
二 願樂する信	26
三 信賴する信	35
三宝への帰依	37

司会者

皆さま ようこそ本日の講演会にお越しく
さいました。

法王ジグメ・プンツォク・リンポチェは1933
年にチベットの東北部にお生まれになられまし
た。約10年前より、チベット地区での弘法活動
に尽力されています。それまでのチベット地区
では、仏教はあまり盛んではなく、法王は、過

去十年来にわたって、多くのチベット人のために、修行法や仏法の解説をして参りました。そして後に、漢民族の弟子も受け入れるようになります。

本日は、法王をお招きすることができ、大変光栄です。法王の今回の訪問は、本当に奇跡的な出来事であり、幾度か行われた電話での連絡は、今考えても非常に感慨深いです。今回の法王のツアー講演は非常に貴重な試みであり、法王をノバスコシア州にお招きできたことは私たちにとって大変幸運な出来事です。ノバスコシア州への法門は、臨時に追加された最後のスケジュールであるため、とっさのことで私たちも準備であわただしかったのです。が、これら全ての出来事に心から喜びと光栄を感じています。それではリンポチェより法話を賜りましょう。ありがとうございます。

ジグメ・プンツォク法王

祈願文

三世の諸仏の本体であり、海のごとき種姓と輪（マ
ンダラ）の遍主、恩深く、無等なる尊者、吉祥の
守護者たる根本ラマの足に頭を押し頂き、敬意を
もって礼拝しつつ帰依します。どうかご加護を授
けて下さい。

善き顔が笑みを帯びて輝いていて、
相好の輝きの花蕊が一切衆生の眼甘露となり、
悲心の花弁は三界に行き渡るほど長い
牟尼王の白蓮華・足蓮に、今日の私の意海は守ら
れる。

オギエン海の島の蓮華の茎から、
勝者の幻化を自然に無功用に成就させた、
円満な相好と功徳の集まりである、
蓮華生（ペマ・ジュンネ）が私の心の蓮華湖を守る。

法尽界における法身の密意を得て、
光明界における報身の刹土を見て、
所化の前に化身を現して衆生を饒益する、
全知の法王に礼拝する。

語獅子の智慧が心に現れ、
普賢の大願を修習し、
諸仏菩薩の事業を持する、
文殊上師の足に礼拝する。

童子身を持し、
智慧の灯明によって〔自らを〕飾り、
世間の愚痴の暗闇を滅する、
文殊に礼拝する。

いつか私が利他心によって、
心の中央の蓮華で童子たるあなたを憶念し、
善説の甘露の声を弘める文殊に、
私の心に吉祥を授けていただけますように。

ジグメ・プンツォク法王

講演

これからお話しすることは主に佛教の智慧と慈悲に関する簡単なお話です。

I

順境のうちに
あるということ

一

南瞻部洲に生まれたこと

私たちは今とても良い機会を得ています。どのような良い機会かという、たとえば、私たちは得難いことに南瞻部洲に生まれました。なぜ南瞻部洲が優れているのかという、東勝身洲、西牛貨洲、北俱盧洲などにもたくさんの世間的な刹土があり、どれも素晴らしい場所で、幸福に溢れています。

二

尊い人の身体を得たこと

しかし、正法を修習する機会はありません。この点で私たちのいる州は、他の州よりも優れているのです。南瞻部洲で人身を得ることは非常に難しいことです。このような機縁を得たことはとても尊いことなのです。特に、地獄、餓鬼、阿修羅など、他の場所に生まれていたら、甚大な苦しみに苛まれるうえ、修行を行うこと

もできないため、とても不憫です。いわゆる天界も、幸福を味わえる場所ではありますが、長い間、散漫した状態にあるため、ここでも修行する機縁はありません。ゆえに、人身を得ることは、天人として生まれることよりも尊いのです。

それだけでなく、仏の説かれた別解脱、菩薩、密教の三種の法を修習するためには、いずれも人身が必要になります。それは修行を行えば成就できるチャンスがあるということです。しかし、天人をはじめとする他の衆生は、今世のうちには満足に修行することはできません。修行するための機縁もありません。だからこそ人身を得ることは非常に尊いことなのです。仏を追随するものとして、天人よりも優れた人身を、この宝物のような人身を、今の私たちのような人身を得たことは、大いに喜ばしいことなのです。

三

ブッダが世に現れた時代に 生まれたこと

仏がこの世間に現れたことも、とても尊いことです。なぜ尊いのかというと、仏がこの世に現れた時間のことを明劫と言い、仏がこの世に現れていない時間のことを暗劫といいます。いわゆる暗劫は何度も現れるのに対し、仏が出世する明劫または賢劫は極稀にしか現れず、巡り合うことも難しいです。仏がこの世に現れることに遭遇し難いのは、衆生が仏法を修行するための順縁を具えるのが難しいからです。ゆえに、仏の出世は尊いのです。

四

ブッダの教えが まだ世に存在していること

そして仏はこの世に現れただけでなく、法も説かれました。そして法を説かれただけでなく、今もなお教法は住世しています。これもま

た非常に尊い機縁なのです。今思えば 仏は出世されただけでなく、更には、三度法輪を転じられました。そして今でもなお、仏法はこの世に住世しています。これは本当に喜ばしいことです。

五 法相を具えた師に 師事できたこと

しかし、仏がこの世に現れ、仏法がまだ住世していますが、たとえ仏が法を説いて、仏法が住世していても、法の真義を開示するためには、ラマや善知識が必要です。ラマや善知識の力に頼らずに自力ですべての仏法を修習することはできないため、ラマや善知識に出会い、仏の説いた道に随って正法の修行をすることは、とても尊いことであり、今私たちはこのような順縁を具えています。南瞻部洲に生まれたこと、仏が世に現れたこと、仏が殊勝なる仏法を説かれたこと、殊勝なる仏法を説かれただけで

なく、仏法が未だに隠没せずに住世していて、さらにそれを開示するラマに出会い、ラマに出会っただけでなく、さらにラマに経典の解説をしていただける、このような尊い機縁を得ることは、まるで優曇華の現れのようにです。これは非常に尊いことであり、非常に喜ばしいことなのです。

II

三種の信心

このような良い機縁を具えるためには、まず自分自身の円満な信心が欠かせません。信心とは何を指すのかというと、信心には、清浄なる信、願樂する信、信賴する信の三種類あります。一口に信心といっても、仏宝に対して生じる清浄なる信、法宝に対して生じる願樂する信、僧宝に対して生じる信賴する信の三種の信心があるのです。

一

清浄なる信

仏宝に対して生じる清浄なる信は、主に仏宝に対して生じる特別な歡喜心です。これを清浄なる信といいます。仏に対して特別な歡喜心を生じる理由は、この世間で、仏が、大自在天、帝釈天、梵天などとは異なる、稀有な功德を持っているからです。ゆえに仏に対して歡喜心を生じるのです。

どこが他と異なるのかというと、たとえば、登地した菩薩でも、仏の智慧の功德しか具えていません。そして仏の功德は、百千万年経っても話しきれません。仏の具える無量の功德を、私たちが全て知ることはできませんが、私たちにとって有益で重要な功德に関しては、やはり知っておくべきです。

私たちが最も知るべきことは何かというと、私たちが一時的な人天の幸福と、究極的な仏の果位を得る方法です。これが、最も殊勝なる仏の功德であり、私たちにとって必要なものです。これが私たちの最も知るべき功德なのです。

たとえ仏に多くの功德があっても、もしそれが自分に有益でなければ、何も喜ばしくありません。あたかも、世間に権力のある国王がいても、もし彼らの存在があなたに有益でなけれ

ば、何も喜ばしくはありません。逆に、どんな国王であれ、あなたにとって有益であれば、それは喜ばしく思うべきです。同様に、仏の功德は私たちに有益であるため、私たちはそれを知るべきなのです。

では、私たちに有益な仏の功德とは何かというと、智の功德、悲の功德、力の功德です。智、悲、力の三種の功德です。

1. 智慧

もし仏が、限りない衆生が幸福を得、苦しみから離れる方法を知っていなければ、衆生を饒益することはできません。しかし仏は諸法を知り尽くしている一切知者です。

2. 慈悲

そして、仏は尽きることのない一切知の功德のみならず、大悲の功德も具えています。智慧の功德があっても、大悲の功德がなければ、所化である衆生を饒益することはできません。

あたかも、一人の人が不可思議な智慧を具えていても、他人に対して悪い心を抱いていたら、どれほど智慧があっても絶対に人助けすることはないように。ゆえに、大悲の功德も必要なのです。仏はどのような大悲心を具えているのかというと、まるで一人息子に対する母親のような大悲です。

しかし、仏の衆生に対する悲心は、母親の子どもに対する愛よりも、幾千・幾百倍も優れています。なぜ母親の悲心より優れているのかというと、仏は、因地において修行している時であれ、究極の正覚者を得た後であれ、自分の体や命を惜しまずに、衆生を饒益していたからです。仏が自分の体や命でさえ惜しまずに、衆生を饒益するために、かつて因地でどのように行っていたのかというと、第一転法輪を転じた場所であるワラーナシーのサールナートで、仏は衆生に利益と安樂を得させるために、多くの

生にわたって、自らの頭蓋を布施していました。これは仏が自ら話していたことです。

仏が衆生のために自分の血肉を布施した場所は、ワーラーナシーだけではありません。同じように、他のありとあらゆる場所で、仏は衆生を饒益するために、数えきれないほど自分の血肉を布施しました。もし仏の悲心が、自分の親しい人、大切な人、気が合う人、仏に対して喜びと敬意を生じる人にだけ悲心を向けられるもので、それ以外の人には向けられないものであれば、そのような悲心は偏りのあるものです。しかし仏の悲心はそうではありません。

ではどのような悲心なのかというと、仏は、この世に在世されていた頃に、身体の右側を帝釈天に白檀によって沐浴されていて、左側を魔王波旬に兵器で傷付けられていました。しかし、仏の両者に対する慈悲心には偏りがなく、両者を共に安楽に導いていました。もし、仏の愛が、身分が高く、受用の円満な衆生にだけ向

けられるもので、低劣な衆生には向けられないものであれば、このような愛は偏りのある愛です。しかし、そうではありません。仏の愛は、高貴な人にも不憫な衆生にも平等に向けられます。

仏の愛は、独裁者のような限りあるものではありません。たとえば、独裁者は幾百・幾千の人に対してであれば、愛を向けることもあるかもしれませんが、一人二人の人に対しては、たとえどんなに不憫でも、喜んで彼らを饒益しようとは思わないでしょう。しかし、仏は、たった一人の衆生に対して、何度も自らの血肉を布施しても、後悔することはありません。無始以来、無数の劫にわたって、一人の衆生を饒益したとしても、仏は嫌悪心を抱くことはありません。このような愛は至高なものです。

このようなお話があります。かつて仏が地獄にいたとき、彼には友がいました。彼らは地獄の中で、極卒に馬車をひくように言われ、武器

で打たれました。釈迦牟尼仏はその時、自分は構わないが、友だけでも助ける方法はないだろうかと思い、極卒に「友の分の苦しみは私に味わわせて下さい」と言い、馬車の縄をすべて自分の首にかけたのです。すると、極卒はさらに怒り狂い、ならば地獄の衆生の業はいったい誰が肩代わりしてくれるのかと言って、鉄鎚を彼の頭に当てて、殺してしまいました。彼は、そのあとすぐに三十三天に生まれ変わりました。

これだけではありません。生涯の間、ずっと仏と対立し、危害を与えていたデーヴァダッタ。思えば、彼は何世にも渡って、常に仏に危害を加えていました。そして、今世においても仏を傷付けようと常に企てていましたが、そのデーヴァダッタに対してでさえ、仏は、体や命を惜しまずに、彼を饒益していたのです。仏のこのような行いは非常に尊いものなのです。

そして、仏はこのように智慧と慈悲の功德を

具えているだけでなく、更に力の功德も具えています。たとえ智慧と慈悲があっても、力の功德がなければ、あたかも、両目や両腕のない母親が、自分の子どもが水に流されてしまった時に、想像を絶する慈悲心があったとしても、水中の子どもを救うことができないように、衆生を饒益することはできません。

3. 力

では仏はどのような力を具えているのかというと、仏は身・口・意の三種の力を具えています。

1) ブッダの身体のカ

まず、仏の身体のカは、仏の姿を一度目にした衆生を、三界輪廻の苦しみから救い、究極の安楽である解脱道に赴かせることができます。仏の姿を目にするだけでこのような功德があるのです。そして、この功德は今でも有効です。仏の身体的功德は、たとえ仏に直接会えなくて

も有効なものなのです。どのように有効的なのかというと、仏は「様々な姿となって衆生を善法に赴かせる」と説かれました。つまり、仏は、仏像や仏画などの様々な形となって、衆生を饒益しているのです。仏像で言えば、仏の舍利塔、金像、土像、木像、石像など、どんなものであれ、それらに対して、礼拝や供養、発願を行うのです。それは仏本人に対して行うことと異なりません。これは経典の中でも説かれていることです。また、仏画で言えば、そこに描かれている仏の姿が美しくても、美しくなくても、それを見た者は不可思議な利益を得ることができます。仏の身体を、信心と恭敬心をもって見ることで、不可思議な福德を得られるのです。たとえ怒りの心で仏のお身体を見たとしても、その福德の力によって、近い将来において、必ず仏の果位を得ることになります。これもまた経典の中で説かれていることです。

2) ブッダの言葉の力

仏の言葉の功德は、仏が教えを説く声を聞くことによって、一心に仏の祈願をしたり、仏の顔を見ることができれば、たとえそれが修行の境地の中であれ、夢の中であれ、速やかに殊勝なる功德を得ることができ、最終的には仏の果位を得ることができます。

これだけではありません。仏が説いた法は、今、文字となって流通しています。それらを音声として聞くだけでも、悪趣への墮落を防ぎ、長寿・無病・受用円満などを得ることができます。私たちのように仏法を聞く機縁のない鳥や動物も、法器である太鼓や法螺貝の音を聞くだけで、近い将来に必ず輪廻の苦しみを脱し、解脱を得ることができます。

3) ブッダの心の力

では仏の意の功德はどのようなものなのかというと、仏は衆生一人ひとりに対して、大慈大

悲の心を持っています。そして衆生を饒益する事業は、永遠に途絶えることがありません。あたかも海に波が存在しない時はないように、仏の衆生を饒益する事業も途絶えることは決してありません。仏は十方の化現刹土の中において、仏に済度される者には、仏の姿を現し、菩薩に済度される者には菩薩の姿を現し、同じように、声聞と縁覚に済度される衆生には、声聞と縁覚の姿となって済度します。また、人間以外の衆生である鳥類には鳥の姿となって済度し、動物には動物の姿となって済度し、魚類には魚類の姿となって済度するなど、様々な姿となって衆生を済度します。それだけでなく、山や木などの姿にもなって仏の正法を説きます。このような方法で、衆生に無量の利益をもたらします。仏は衆生一人ひとりに対して、昼夜問わず、常に様々な方便を用いて衆生を饒益するのです。衆生を饒益しない時はありません。で

すので、私たちが仏に歓喜心と恭敬心を抱く理由はここにあるのです。

これまでのお話しの重複になりますが、もし仏が衆生を饒益するための方便を知らなければ、仏に好感を持つ人はいないかもしれせん。しかし、仏は諸法を知り尽くしています。たとえ仏が全知であっても、大悲心がなければ、衆生を導くことはできませんが、仏は大悲心を具えています。仏が智慧と大悲心を持していても、衆生を済度する能力がなければ、衆生を饒益することはできませんが、仏は無碍の力を具えています。このような智慧・慈悲・力の無比なる功德を具えているのは仏だけです。どの世界の誰にも具わっていません。私たちが自分の心に安住して、よく観察すれば、心臓と大脳のない人間でない限り、仏に対して信心が芽生えないはずはありません。

二 願樂する信

次は、法宝に対する願樂する信です。法宝に生じる願樂する信は何かというと、仏の説かれた法の通りに修行するという考えです。仏法を修習するということは、善法を修習し、不善法を断ち切ることです。善法とは何かというと、要約すれば、衆生を傷付けまいとする慈心と悲心を修習することです。上等・中等・下等のいずれの衆生に対して、加害心を持ったり、危害を加えたりすることが、すなわち不善法です。

衆生を傷付けない行為として、仏は沙門四法を説きました。沙門とは、仏の追随者全般を指します。つまり、これは皆さんの行うべき四つのことを指します。

それは何かというと一つ目は、「他者が怒っても自分は怒らない」ことです。他者が自分に瞋恚を生じてても、自分は他者に瞋恚を生じない

ということです。「他者に罵られても自分は罵らない」こと、他者がどんなに自分を罵っても、自分は相手を罵らない、これが二つ目です。「他者に打たれても打たない」こと、他者が石・棒・兵器などで自分を打っても、仏の眞の追隨者であるのならば、打ち返してはいけないということです、これが三つ目です。「悪口を言われても言い返さない」こと、たとえば、他人があなたの両親の悪口を言ったり、あなたは醜い、あなたは貧乏だ、あなたは嘘つきだ、あなたは泥棒だなどと様々な悪口を言ったとしても、他人に言い返してはいけません。これが四つ目です。

仏法の中には「あらゆる利益は全て他者に捧げ、あらゆる損失は全て自分が受け入れる」という言葉があります。つまり、利益や成功は全て他人に捧げ、損失や失敗は全て自分が引き受けるということです。仏の沙門四法を行ずることができれば、仏の良き追隨者になることがで

きます。もし行えなければ、口でいくら仏の追随者であると言っても、実際には口先だけの追随者でしかなく、真の追随者ではありません。では、どのように修習していくのかというと、たとえば、ある人が自分を傷付けたとしても、自分はその人に瞋恚を生じないでください。

たとえいつも自分が我が子のように大事にしている人が、自分に何も非がないのに、自分に危害を加えてきても、その人に瞋恚を生じてはいけません。たとえば、子どもが発狂して母親を傷付けたとしても、母親は子どもに対して瞋恚を生じることはなく、ただ子どもの病気が治ることを祈るでしょう。同様に、自分がいつも手助けしている人が、かえって自分を傷付けてきたとしても、彼はいつになったら煩惱から脱することができるだろうという慈悲心を向けるのです。

もしあなたが他人を傷付けたのなら、他人が反撃するのは当然のことであり、それに腹を立てるのはおかしいことです。また、もし自分に針一つ分の非もないなかで、他人があなたに甚大な危害を加え、あなたの頭蓋をたたき割ったとしても、私たちは彼らに瞋恚を生じてはいけません。それに、彼らが為した業は必ず彼ら自身に戻ってきます。このように考えてみましょう。次に、何人に悪口を言われても、瞋恚を生じてはいけません。たとえ多くの国に自分の悪い噂が流されても、なお彼らに歓喜心を抱き、彼らの功德を讃えるべきです。あなたと立場などが平等な人、または立場が上の方があなたを軽視したとしても、当然のことだと考えましょう。あなたより立場が低い人があなたに様々な屈辱を与えたとしても、彼らに瞋恚を生じずに、むしろ恭敬して受け入れましょう。これが仏の伝統的な教えです。仏が説いた法はいずれ

も他人を饒益するものであり、無害で平和な道です。

もしかしたら、こう思う人がいるかもしれませんが。仏の教えは素晴らしいけれど、これを実践できる人は中々いない。この法を修習することはできない、と。しかし方法はきっと有ります。最初から実践に入るのは、仏教入門者といわず、チベット人の出家者であり、ラマでもある私から見ても、容易なことではありません。ゆえに、私たちは出来るところから順次に、仏の説いた法要を修習するのです。たとえば、チベットの徳高いラマの方々は、自分の命を落とすことになっても、他人を傷付けたり、他人の財産を盗んだりしません。皆さんにとっては、これから先、誰の命も奪わず、誰の財産も盗まないことを、完璧に守るのは難しいかもしれませんが、それでも少しずつ実践していかなければいけないのです。いずれに

せよ、衆生を傷付けないように努力しましょう。

仏はかつて「他者を傷付ける者は沙門ではない」と説かれました。他者に悪の心に向け、危害を加えるような者は、仏の真の追隨者とは言えません。仏もこのように説かれています。また、仏の言葉の中には、「自心を調伏し、他心を乱さないことが仏教である」という言葉があります。自分の心を鍛えつつ、他者の心を乱さないように心がけて、自分にできることを徐々に修習していくのです。

では、どのように自分の心を鍛えるのかというと、自相續が仏法に沿っていない状態のとき、たとえば瞋恚や貪欲、他者に対する嫉妬心、自分が他者よりも優れているという優越感など、このような不善心が生じた時は、すぐにそれを察知し、阻止するのです。正念正知で自分の心を守り、悪い分別念が生じないようにす

るのです。ラマと三宝の加持を得られるように、できるだけラマと三宝に祈願します。他人の心を守るために、身体的に他人を傷付けず、言語的にも粗語を慎み、意識的にも、悪い分別念によって他者の心を乱さないようにします。

もし他者の心を乱すような悪い心が生じたら、根本から断ち切るようにしましょう。もしそれができなければ、後悔の心を起こしましょう。ああ、私は仏の追随者なのに、他人の心を乱してしまっている。これからは気をつけよう、と強く誓うのです。この際にもラマと三宝に祈願します。どうして他人を傷付けないように、自分の心を守ることが、これほど重要なのかというと、今世において、長寿無病、円満な受用、美しい外見、他者からの敬いをはじめ、多くの功德を得られるからです。今世のみならず、来世も極楽浄土などの清浄なる刹土に生まれて、最終的には仏の果位を得て、あらゆる苦

しみから離れ、あらゆる安楽を得ることができません。

もし仏の法を一人の人が行えば、その人自身が安楽を得、苦しみから離れられます。もし家族でこのように行えば、家族全員が安楽を得られます。もし一つの町の人が仏法を行えば、その町中の人が一時的な幸福と究極的な幸福を得られます。もし一つの国の人が行えば、その国中の人安楽を得られます。もし世界中の人が仏法を行えば、世界中の人が幸福と安楽を得られます。世界中が平和になり、栄えていき、苦しみが減り、幸福は増えていきます。

どんな衆生であれ、誰もが安楽を得て、しみから離れたいと思っているはずで、逆に、安楽から離れ、苦しみを得たいと思っている人は、あまりいないのではないのでしょうか。そして、一切衆生が安楽を得、しみから離れる方法は、仏の説いた法しかありません。先ほど

お話ししたことを、よく考え、観察してみれば、体内に心臓がない人や頭の中に脳がない人でない限り、仏の説いた法を敬わないことはないはず。もし、繰り返し何度も観察しても、仏の法を敬わない人や信じない人がいたら、チベットではそのような人のことを、心臓と脳がない人と呼びます。チベットの慣用句のようなものです。仏の追随者として、身体という肉の塊の中で最も大切なものは、心臓ではありません。頭の中でも、ヨーグルトのようなぐちゃぐちゃな脳みそが最も重要なわけではありません。逆にこのような見解を持つ人のことをまさに心臓と脳がない人というのです。もし心臓と脳のある人になりたければ、修習すべき仏法を正しく知ることです。ただ寝たり、歩いたり、服を着たりできるだけでは、心臓や脳があるとはいえません。誰もそうとは認めてくれないうしょう。このような仏法に対する信心を願樂する信といいます。

三 信賴する信

そして僧宝に対する信心を信賴する信といいます。僧宝とは仏の追隨者を指します。仏の追隨者として、自利と利他を唯一の目標として精進する者のことです。仏の追隨者のうち、南瞻部洲で言えば、小乗の僧侶は衆生を傷付けません。大乘の僧侶は、衆生を傷付けないだけでなく、更に衆生を饒益します。そして、金剛乗の僧侶は、広大な衆生を饒益し、速やかに成就します。このように、三種の異なる僧侶がいます。

もしその人が衆生を饒益する人であると知れば、その人に対して不信感を抱く人はいないはずです。たとえば、あなたに友人がいて、あなたと会った時に、いつも彼が嬉しそうにできて、喜んでいて、あなたを慕っていて、背後でもあなたのことを褒め称えていたら、そのような友人はあなたにとって良い友です。あなたも

きっと彼のことを信頼するでしょう。反対に、表面上はあなたのことを褒め称えていても、背後ではあなたの悪口を言う友人もいます。そのようにあなたを傷付ける友人は、信頼を得られないでしょう。僧宝に対して信頼する信を生じる理由はここにあります。

III

三宝への帰依

以上、三宝の功德について簡単にお話ししました。あなたは三宝に好感を持ってましたか？どうですか？三宝に好感を持てる人は挙手して下さい。見たところ、たくさんいますね。では三宝に好感を持ってない人も挙手してみてください。素晴らしいです。皆さん三宝に好感を持っていただけたようですね。

今後どの生まれにおいても、円満な功德を具える仏に祈り、衆生を傷付けない正法を行い、正法を行ずる僧侶と行いを共にし、自相続の中でこのような修行の誓いを立てましょう。このような誓いを立てたら、心の前で合掌し、この言葉を繰り返し唱えます。

「師に帰依し、
仏に帰依し、
法に帰依し、
僧に帰依します。」

今、皆さんはすでに帰依戒を授かりました。今日から、皆さんは法相を具えた仏教徒です。

今から、あなたたちはどんな世間法と出世間法を行っても、障害なく、意のままに成就できるでしょう。人や非人による障害に遭遇しても、三宝の加持と加護を得られます。もし普段から常に三宝を手放さなければ、今世において安樂を得られるだけでなく、来世においても、地獄・餓鬼・畜生の悪趣に生まれることはありません。皆さんが、先ほど立てた誓いと信心を堅固なものにすることができるのなら、きっと今回得た人身も有意義なものになります。

皆さんの中には カナダで生まれた方もいれば、アメリカで生まれた方もいると思いますが、いずれにせよ、今日のように有意義な時間を過ごせたことは、とても貴重なことだと思います。なぜこのように言うのかというと、アメリカの方も、カナダの方も、大多数の方はきっと一生のうち、土曜日や日曜日以外は、生活のために仕事をしていることが多いと思いますが、たとえ、そのように生涯のあいだずっと働

き続けていても、アメリカの富豪“デイヴィッド・ロックフェラー”のような富を築くことができるとは限りません。実際には、努力していても、財産や衣食、名声などにおいて特別な成就を遂げられるものはごくわずかです。しかし、本日は、一生分の努力の対価を超えるほどの収穫を得ることができました。私はこのように思います。

皆さんの中には以前からすでに仏教に入門していた人もいると思いますが、いずれにせよ、もし仏法に信頼する信を生じていただけたのなら、とても嬉しく思います。皆さんが今回の法話に参加したことも、とても良い機縁だと私は思います。帰依の学処もそうです。今から常に仏に祈願することを忘れないで下さい。法に帰依してからは、できるだけ衆生を傷付けないようにしましょう。僧に帰依してからは、仏の全ての追隨者に対して、恭敬心と信心を生じまし

よう。このように行うことで、心の願いを実現させることができます。

もともと今日、委員会の方に依頼されたテーマは、慈悲と智慧に関するお話でした。招待状にもそう書かれています。しかし私は、普通の慈悲と智慧についてではなく、仏の智慧と慈悲と関連させてお話しさせていただきました。皆さんにより多くの利益があればと思ったのです。私は大した話術があるわけではありませんし、声もあまりいい声をしているわけではありません。ですので、皆さんにとっては、あまり聞き心地の良いものではなかったかもしれませんが、私のお話しした内容は、皆さんの今世と来世にとって利益のあることですので、心に留めていただけたのなら幸いです。今日の法話はここまでとなります。明日にも別の法話が予定されていますが、もしよろしければまたお越しください。



www.khenposodargye.org